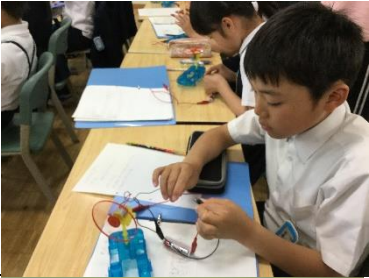
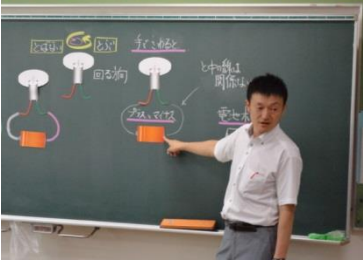





小学校理科教育 理論研修会 終了報告

テーマ	言語活動をいかした、思考がつながる授業づくり	
日時	平成29年 6月23日(金)	
会場	北海道教育大学付属札幌小学校	
講師	三田村 剛 氏 (北海道教育大学付属札幌小学校 教諭／北海道小学校理科教育研究会 研究部長)	
参加者	約30名	
研修会 の 様子		<p>はじめに付属札幌小学校 4年2組教室にて『電気のはたらき』単元の授業公開を行って頂いた。児童はモーターを回転させてプロペラを飛ばすための方法を試行錯誤しながら考える活動を行った。子どもたちのやってみよう、次はこれをやってみようという思考の流れを意識し考えを膨らませていく授業は、参加者にとって大変参考になるものであった。</p>
		<p>とくに教材では、ただモーターとプロペラを与えるのではなく、途中にクリップ導線や電池ボックスをはさんだものを操作させていた。これはあえて導線の向きや電池ボックスにもプロペラが飛ぶか飛ばないかのヒントが隠れているようにあえて考えさせるという指導者側の意図があった。参加者は、目的意識を持たせつつ課題解決力を高めるための教具の工夫について学ぶことができた。</p>
		<p>三田村氏には授業の最後に、今年の石教研理科(小)部会での研究のテーマである『ふりかえり』の活動を取り入れて頂いた。「何を書いたらいいのか」という漠然とした疑問に対して、先生の「今日分かったことや次に調べてみたいことを書いてごらん」との助言と子どもたちの書く活動を実際に観察することで、理科部会の目指す方向性が参加者に伝わった。</p>
		<p>授業後の分科会では、書く活動をどうするのが論点になった。書くことでやってみようという意欲がトーンダウンしてしまう可能性があることや逆に書かせることで思考を整理できることも考えられるなどの意見が出た。また、ふり返りの場面での児童に書かせるための視点「今日やったことがどうだったのか」を日々の実践で積み重ねていく重要性について参加者全員が確認できた。</p>
		<p>最後の講話では『これからの理科授業の在り方』についてお話して頂いた。新学習指導要領になってからの変更点や問題解決の力を高める授業の在り方について学んだ。「やってみよう」の導入から「はっきりさせていく」ことが追究の原動力になることや「うまくいかない体験」を視点に授業を組み立てていく必要性についても学ぶことができた。</p>